肌の白さの嗜好に関する比較文化的研究¹

——日本とインドネシアの比較——

早稲田大学 齋藤美穂

A cross-cultural study on preference for lightness of complexions: Comparison between Japan and Indonesia

Miho Saito (School of Human Sciences, Waseda University, Mikajima, Tokorozawa 359)

Using 176 Japanese and 132 Indonesian university students as subjects, the author investigated the preference for light complexions and the cultural influence on it from the viewpoint of the psychological structure of the aesthetic preference for white. In the first survey, the subjects were asked to choose their preferred colors from a color chart in order to know their general preference for white. In the second survey, the subjects were asked to answer a questionnaire designed to discriminate personal images for the four stimuli of different complexion. The results showed that positive images were associated with a fair complexion in Japan. In Indonesia, on the other hand, the images associated with a fair complexion were rather negative although white itself was highly accepted. Association with images of rareness and scarcity for a fair complexion was, however, common to both countries. This may suggest that the preference for white and whiteness derives from images of something unique and special.

Key words: colors, preferences, preferences for complexions, cross-culture, personal images.

白に対する嗜好順位が、我が国における色見本を使用した選択法による色彩嗜好調査結果の中で比較的上位に出現し始めるのは Tsukada, Funatsu, & Sato (1964) の研究以降であり、その後の日本色彩研究所 (1992) による嗜好調査結果の継年変化および齋藤・富田・向後 (1991), また齋藤・富田・山下 (1991) による東京・大阪・福岡・富山の4都市で実施した調査結果からも日本での白嗜好は高く安定していることが確認されている。また齋藤 (1981) は日本人の色彩嗜好傾向を欧米など九つの文化的グループの間で比較し、日本での白嗜好の高さは他の文化的グループには観察されない傾向であることを報告した。更にこの研究における分析の中で得られた D-score の値を各地域で検討してみると、日系アメリカ人は日本人よりもアメリカ人に近い色彩嗜好傾向をもつことがわかり、色彩嗜好に対して居住地域の文化的環境要因の影響性を示唆する結果となった。文化的環境要因が色彩嗜好に影響を与えらると思われる結果は既存の研究でも報告されている。よってこのような文化的・環境的側面が仮に色彩嗜好の影響要因として重要なものであるならば、日本で観察された白嗜好が地理的・文化的に近いと考えられる周辺のアジアの地域でも観察される可能

性があると考え、まずソウルと東京との色彩嗜好傾向の比較 (齋藤, 1992) を行い、続いて天津、台北、東京での比較研究を実施した (Saito, 1994)。その結果、白嗜好は他の周辺アジア地域でも観察され、むしろその傾向は日本を上回っていることがわかった。

白に対する嗜好理由を調査の自由回答から探ると、東京やソウルでは“清潔感”や“純粋”が主な理由となっているが、天津や台北では“純潔”が最も多く、時には白に対する“神聖視”も見られた。日本文化の中でも白に対する神聖視は、神道における天照大御神のような太陽信仰とのかかわりで説明されている。ここでの白は太陽の光の色という意味をもつ。神道の素木造りの神殿や御幣などに見られる白の使用も、生なりの無垢なものや清らかなものとしての白と考えられている。このように白が好ましいとされた背景には光、すなわち明るさとかかわりが多分に見られる。

ところで肌の色においても、見た目の肌の白さは主にその明るさと関連する。また肌の色に対して日本では古くから白さを好ましいとするような表現がある。そこで本研究ではこのような白嗜好が関連していると思われる具体的事象として、肌の白さに対する嗜好を研究し白嗜好とのかかわりを検討することとした。肌の白さのように具体的事象になった場合、これまでの色紙の白への嗜好とは異なり生活文化といった面での影響を一層強く受けるものと考えられる。特に肌の色

¹ 本研究は財団法人コスメトロジー研究振興財団からの1992年度助成研究である。

Table 1
日本とインドネシアにおける嗜好色と嫌悪色の順位一覧表

	嗜好色				嫌悪色			
	日本		インドネシア		日本		インドネシア	
1st	vivid-blue	32.0% ***	white	24.2% ***	olive	23.4% ***	gold	29.9% ***
2nd	white	16.0% ***	vivid-blue/ black	19.1% 19.1% ***	gold	16.0% ***	dark-blue	15.3% ***
3rd	vivid-red	12.0% ***			grayish-pink	12.0% ***	vivid-red/ vivid-yellow/ silver	14.6% 14.6% 14.6% ***
4th	vivid-green/ pale-sky	9.7% 9.7% ***	light-blue	16.6% ***	dark-red	10.3% ***		
5th			light-green	12.1% ***	dark-yellowish- brown/ dark-gray	9.7% 9.7% ***		
6th	pale-greenish- sky	9.1% ***	pale-sky	10.8% ***			dark-red-purple/ black	13.4% 13.4% ***
7th	pale-green/ light-green/ deep-blue	8.6% 8.6% 8.6% ***	pale-greenish- sky/ vivid-red	10.2% 10.2% ***	grayish-yellow- green	8.6% ***		
8th					vivid-purple/ medium-gray	8.0% 8.0% **	olive-yellow	10.8% ***
9th			light-violet	8.9% ***			dark-red	9.6% ***
10th	vivid-yellow	8.0% **	pink	8.3% **	beige/ dark-red-purple	7.4% 7.4% *	vivid-purple	8.9% ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ (by binominal test)

への嗜好は文化的環境要因の影響がより多く考えられる具体的事象と思われる。よってこの肌の白さに対する嗜好が地理的・文化的に異なる環境においてどのような傾向を示すかを検討する。

色彩への嗜好は形態や材質という他の属性の影響を受けることは従来の研究からも明らかであるが、ここで肌の色を取り上げ、地理的文化的に異なる地域で比較することの意義は、もし肌の色への嗜好がその地域での文化や一般的な肌の色への考え方などの上に成り立っているのだとしたならば、仮に色紙における白嗜好が観察されたとしても、明るい肌の色は必ずしも好

まれないのではないかと仮定するからである。またもしそうであるのなら肌の色の好ましきの基準は文化によって異なると仮定できる可能性もあるからである。

本研究の調査対象地域は日本とインドネシアとした。研究は調査1と調査2により構成されているが、調査1では選択法により得た両地域の一般的嗜好色における白に対する嗜好とその選択理由を確認し、続く調査2では主として明るさ（白さ）の異なる4種類の肌色刺激に対する評価語との関連を検討した。

調査 1

目 的

両地域の一般的嗜好色における白への嗜好傾向を探ると共にその選択理由を得ることを目的とした。

方 法

被験者 東京の日本人大学生 176 名（男性 90 名，女性 86 名），平均年齢 21.3 歳，およびジャカルタのインドネシア人大学生 132 名（男性 68 名，女性 64 名），平均年齢 24.8 歳。被験者総数 308 名（男性 158 名，女性 150 名）。

刺激 ニュートラルグレーの A3 判台紙に貼付された 77 色のカラーチップ（各 2.0 cm×3.5 cm）で構成されたカラーチャートを使用。有彩色 70 色（10 色相×7 トーン），無彩色 5 色および金色と銀色。

手続き 被験者にはカラーチャートを見ながら嗜好色と嫌悪色を 3 色ずつ 1 位から 3 位まで選択すると同時に選択理由も答えてもらい，この結果をもとに一般的嗜好順位を得た。使用照明は蛍光灯で 1 人—3 人を同時に面接した。実施期間は 1992 年 4 月から 1994 年 1 月である。

結 果

Table 1 は両地域の選択色の順位を嗜好色と嫌悪色のそれぞれについて上位 10 位まで一覧表にしたものである。この中で白の嗜好のみに着目するならば，白は両地域において非常に好まれる色であることがわかる。またその傾向は日本よりむしろインドネシアで上回っていることも明らかとなった。

この白に対する選択理由を調べてみると日本では“清潔”が最も多く，その次に“純粹”“きれい”“何とでも調和する”“明るくはっきりしている”“太陽の光に近い”“すっきりしている”“さっぱりしている”“さわやか”“飾られていない”“安心する”“目をひく”“やさしい”などが続く。インドネシアでもやはり“清潔”が第 1 の選択理由であるが“純潔（純潔の象徴も含む）”“明るい”“中立”という理由も多く見られる。その他“何色とでも調和する”“上品”“涼しい”“自然”“落ち着いた”“権威のある”などが多い理由であった。また両地域とも“けがれのない清潔さと明るさ”が共通した嗜好理由であることがわかった。

嫌悪色として白が選択されることは日本では全くなかったが，インドネシアでは 3.2%（5 人）あり，その理由としては“明るすぎる”“汚れやすい”“単純”という理由が主なものであった。

調査 2

目 的

調査 1 では，白への嗜好が両地域とも高く，また白のもつ“けがれのない清潔さと明るさ”が両地域に共通した嗜好理由であることが明らかとなった。

調査 2 では，この白の嗜好が肌の白さというものに対してどのように関連してくるか検討することを目的とする。このために主として明るさの異なる 4 種類の肌色刺激に対して 52 項目からなる評価語との関連を検討することにより白への嗜好性を肌の白さ（明るさ）に対する心理的側面から探ってみることにした。

方 法

被験者 調査 1 と同様。

刺激 多数の日本人の肌色の測定から日本人の代表的な肌色を分類した肌色調査結果（小林，1967）に基づき，ナチュラル肌の肌色色票から代表的な以下の 4 種を刺激とした。括弧内は JIS 記号。これらの肌色色票を B5 判の大ききで作成し，その上に女性の顔の輪郭（Figure 1）が描かれた OHP シートを重ね，これをもって 4 枚 1 組の刺激とした。

刺激 1：色白肌（5.0YR 7.5/4.0）

刺激 2：普通肌の色白寄り（5.0YR 7.0/5.0）

刺激 3：普通肌の色黒寄り（5.0YR 6.5/5.0）

刺激 4：色黒肌（5.0YR 6.0/5.0）

手続き 白さ（明るさ）は多分に相対的な関係も考えられるので，1 組中の 4 刺激を 1 より順に左から同時提示し，被験者にはそれらを見ながら，Table 2 のような 52 項目よりなる評価語（容貌を手がかりとしたパーソナリティーイメージの因子分析結果（岩下，1983）を参考にして選出）に対して最も適切だと思う順番に刺激の順位付けをしてもらった。この手続きにより得られた結果に対し，各評価語に対して順位づけ

Figure 1. OHP シートに描かれた女性の顔の輪郭図（実物の刺激は B5 判大）。

Table 2
日本語とインドネシア語による評価語一覧

評価語		評価語	
日本語	インドネシア語	日本語	インドネシア語
01) 美しい	01) cantik	27) 軽い感じ	27) rasa ringan
02) 明るい感じ	02) cerah	28) 意志が強そうな感じ	28) semangatnya besar
03) 女性的な感じ	03) feminim	29) 貴族的な感じ	29) bangsawan
04) りこうそうな感じ	04) cerdas	30) 保守的な感じ	30) tertutup
05) 親しみやすい感じ	05) ramah tamah	31) 善人のような感じ	31) baik hati
06) ふけた感じ	06) kelihatan tua	32) デリケートな感じ	32) mudah tersinggung
07) のんびりした感じ	07) santai	33) 特色のある感じ	33) rasa bersifat istimewa
08) 貧相な感じ	08) miskin	34) 清潔な感じ	34) rasa bersih
09) 派手な感じ	09) nyolok	35) ていねいな感じ	35) sopan
10) 柔らかい感じ	10) lembut	36) うちとけた感じ	36) terbuka
11) はきはきとした感じ	11) tegas	37) 幼い感じ	37) belum dewasa
12) 近づきやすい感じ	12) mudah bergaul	38) 上品な感じ	38) anggun
13) 古くさい感じ	13) kuno	39) 愉快的な感じ	39) gembira
14) いやらしい感じ	14) rasa jijik	40) ねちねちした感じ	40) murung
15) 陽気な感じ	15) riang	41) 消極的な感じ	41) perasaan negatif
16) 丸みのある感じ	16) kelihatan bulat	42) やさしい感じ	42) lemah-lembut
17) きりっとした感じ	17) kelitatan rapi	43) おとなしい感じ	43) patuh
18) 好き	18) senang	44) 甘い感じ	44) lalai
19) 落ち着いた感じ	19) rasa tenang	45) うすべらかな感じ	45) pemikirannya dangkal
20) 弱々しい感じ	20) kelihatan lemah	46) あたたかい感じ	46) perrasaan hangat
21) 知性的な感じ	21) intelek	47) あじわいがある感じ	47) menawan hati
22) モダンな感じ	22) modern	48) しゃれた感じ	48) pesolek
23) 育ちがよい感じ	23) rasa terpelihara	49) 女らしくない感じ	49) tidak feminim
24) うわべだけの感じ	24) rasa tidak tulus	50) おだやかな感じ	50) rasa damai
25) 可愛らしい感じ	25) lucu	51) いばった感じ	51) sombong
26) 静かな感じ	26) rasa sepi	52) 魅力的	52) menarik

られた刺激の第1選択に着目して数量化 III 類による分析を行った。使用照明・聴取法・実施期間は調査 I と同様。

結 果

刺激 1 (色白肌) に関する分析結果 Table 3 は、刺激 1 を第 1 選択とした評価語を、選択率順に上位 15 位まで示した一覧表である。刺激 1 が第 1 選択になった評価語として総合的に最も多かったものは“弱々しい”の 275 反応であった。Table 3 から両地域とも色白肌は“弱々しい”イメージと最も結びついている点は共通しており、そのほかに共通してもたれているイメージの上位には、“貴族的な”、“デリケートな”、“静かな”、“育ちがよい”、“保守的な”、“清潔な”が見られる。

しかし日本では、“おとなしい”、“上品”、“消極的”、“女性的”、“ていねいな”、“柔らかい”、“美し

い”、“可愛らしい”というイメージがインドネシアよりも多く選択され、インドネシアでは、むしろ“いばった”、“派手な”イメージや“特色のある”、“しゃれた”イメージ、また“幼い”、“軽い”、“明るい”、“きりっとした”というイメージが日本よりも多く選択されているのがわかる。

また Table 4 の 1%水準で有意に多く選択された評価語を眺めてみると、このほかに日本では“知性的な”、“おだやかな”、“古くさい”、“のんびりした”、“落ち着いた”等、むしろ静的なイメージがもたれているのに対して、インドネシアでは“愉快的な”、“陽気な”等、動的なイメージを色白肌に抱いていることがわかった。

Table 5 は両地域の性別における比較であるが、日本の男性に特に多く見られる評価語は、“ていねいな”と“知性的な”であり、女性では、“可愛らしい”と“甘い”であることがわかる。“おとなしい”と“柔ら

Table 3
刺激1(色白肌)に対する評価語の上位一覧表

日本		インドネシア	
評価語	選択率 (%)	評価語	選択率 (%)
1位 弱々しい	92.0	弱々しい	85.6
2位 貴族的な	86.4	清潔な	85.6
3位 デリケートな	85.8	いばった	78.0
4位 静かな	83.5	貴族的な	71.2
5位 おとなしい	83.0	幼い	70.5
6位 上品な	81.3	しゃれた	70.5
7位 育ちがよい	79.5	明るい	65.2
8位 消極的な	77.3	派手な	59.8
9位 女性的な	75.8	きりっとした	59.1
10位 保守的な	71.0	特色のある	59.1
11位 清潔な	69.9	保守的な	56.8
12位 ていねいな	68.2	デリケートな	56.8
13位 柔らかな	64.8	静かな	55.3
14位 美しい	60.8	育ちがよい	54.5
15位 可愛らしい	55.1	軽い	53.0

かい”というイメージも女性の方がより多く選んだ評価語と考えられる。インドネシアの男性の方に多く見られる評価語としては、“きりっとした”と“やさしい”であり、女性では、“うわべだけの”と“保守的な”が多く選ばれたが、“しゃれた”というイメージも女性の方に多く選択されていた。

上述のことからも両地域における色白肌への評価が異なっているようであることがわかるが、更に数量化III類により結果を分析してみた。Figure 2は数量化III類による分析でのカテゴリースコアを1軸と2軸によりプロットしたものである。1軸は、陰気で消極的な感じか、陽気で活発な感じかを分ける軸であり、積極性・消極性の軸と言えよう。それに対し2軸はうわべだけの表層的な感じか、あたたかい善人そうな感じかを分けている軸のようである。

Figure 3の日本とインドネシアの性別および国別のプロットを含めて考え合わせると、インドネシアでは日本に比べ色白肌に対して“特色のある”イメージ(I; 59.1%++, J; 10.2%--)²や“しゃれた”(I; 70.5%++, J; 37.5%--)“明るい”イメージ(I;

² 括弧内のI, I-m, I-f, J, J-m, J-fはそれぞれインドネシア、インドネシア男性、インドネシア女性、日本、日本男性、日本女性を示す。

Table 4
1%水準で有意差のあった評価語

地 域	評価語	選択率 (%)
日 本	貴族的な	86.4
	デリケートな	85.8
	静かな	83.5
	おとなしい	83.0
	上品な	81.3
	育ちがよい	79.5
	消極的な	77.3
	女性的な	75.6
	保守的な	71.0
	ていねいな	68.2
	柔らかな	64.8
	美しい	60.8
	可愛らしい	55.1
	知性的な	50.0
	おだやかな	50.0
インドネシア	のんびりした	49.4
	古くさい	48.3
	落ち着いた	42.6
	りこうそうな	37.5
	善人のような	36.9
	貧相な	32.4
	ふけた	30.7
	清潔な	85.6
	いばった	78.0
	幼い	70.5
	しゃれた	70.5
	明るい	65.2
	派手な	59.8
	きりっとした	59.1
	特色のある	59.1
	軽い	53.0
	うわべだけの	43.2
	あじわいがある	34.8
	陽気な	28.0
	愉快的な	27.3

65.2%++, J; 36.4%--)はもっているようであるが、同時に“いばった”(I; 78.0%++, J; 26.1%--)“女らしくない”イメージももっており、日本人がもっているような“女性的”(J; 75.6%++, I; 25.8%--)で“おだやかな”(J; 50.0%++, I; 29.5%--)“のんびりした”(J; 49.4%++, I; 20.5%--)イメージはあまりもたれていないことがわかる。特に“うわべだけ”の表層的なイメージの方

Table 5
刺激1(色白肌)に対する評価語の上位一覧表——性別による比較——

順位	日本男性		日本女性		インドネシア男性		インドネシア女性	
	評価語	選択率(%)	評価語	選択率(%)	評価語	選択率(%)	評価語	選択率(%)
1位	弱々しい	92.2	弱々しい	91.9	清潔な+	86.8	弱々しい	85.9
2位	貴族的な+	88.9	おとなしい++	90.7	弱々しい	85.3	清潔な	84.4
3位	デリケートな++	84.4	デリケートな++	87.2	いばった++	77.9	しゃれた++	81.3
4位	静かな+	81.1	静かな++	86.0	貴族的な	73.5	いばった++	78.1
5位	上品な++	81.1	貴族的な	83.7	幼い+	72.1	保守的な	71.9
6位	育ちがよい+	77.8	上品な++	81.4	明るい++	67.6	貴族的な-	68.8
7位	消極的な++	76.7	育ちがよい++	81.4	きりっとした++	66.2	幼い	68.8
8位	おとなしい+	75.6	消極的な++	77.9	派手な++	66.2	特色のある++	67.2
9位	清潔な	74.4	女性的な++	77.9	しゃれた	60.3	デリケートな	64.1
10位	女性的な++	73.3	柔らかい++	72.1	育ちがよい--	52.9	明るい+	62.5
11位	保守的な	71.1	可愛らしい++	72.1	静かな--	51.5	静かな-	59.4
12位	ていねいな+	66.7	保守的な	70.9	軽い+	51.5	育ちがよい-	56.3
13位	知性的な++	66.7	清潔な--	65.1	特色のある++	51.5	軽い++	54.7
14位	美しい	60.0	甘い++	62.8	デリケートな--	50.0	うわべだけの++	54.7
15位	柔らかい	57.8	美しい+	61.6	やさしい	48.5	派手な++	53.1

注) 表中に++および--とあるのはパーセントにおける有意差検定において1%水準で有意差の見られたものであり、+および-とあるのは、5%水準で有意差のある場合を示す。いずれの場合もその評価語に対する総合的な選択率に対して、各カテゴリーの選択率が相対的に有意に高いか低いを示すものである。

向にベクトルが向いているのは、インドネシア人女性の方であることがこの図からもわかる(J-m; 21.1%--, J-f; 37.2%, I-m; 32.4%, I-f; 54.7%++)。インドネシア人男性の方は、女性に比べると“きりっとした”, “陽気な”(J-m; 7.8%-, J-f; 4.7%--, I-m; 32.4%, I-f; 23.4%) イメージの方向にベクトルが向いている。

日本人男性は, “善人のような”(J-m; 44.4%++, J-f; 29.1%, I-m; 22.1%, I-f; 14.1%--), “りこうそうな”(J-m; 45.6%++, J-f; 29.1%, I-m; 27.9%, I-f; 14.1%--), “好き”(J-m; 44.4%++, J-f; 31.4%, I-m; 29.4%, I-f; 25.0%), “意志の強そうな”(J-m; 22.2%++, J-f; 4.7%--, I-m; 14.7%, I-f; 7.8%) 等の方向にベクトルが向いているが, 日本女性の特徴は, “貧相な”の方向にベクトルが向いていることである。刺激1に対して日本人全体としてはポジティブなイメージを抱いているものの, 日本女性の中では“貧相な”というイメージをもっている被験者が男性より若干多かったことに起因する(J-m; 30.0%+, J-f; 34.9%++, I-m; 5.9%--, I-f; 4.7%--).

刺激2(普通肌の色白寄り)に関する分析結果 刺激2を第1選択とした評価語として総合的に最も多かったものは“近づきやすい”の149反応であった。両地域に共通して多く選ばれた評価語は“好き”, “おだやかな”, “魅力的”, “知性的な”, “りこうそうな”, “モダンな”, “美しい”, “善人のような”であった。日本の上位評価語の中でインドネシアの上位評価語に挙がらなかったものは, “うすっぺらな”, “近づきやすい”, “親しみやすい”, “あたたかい”, “うちとけた”, “明るい”, “可愛らしい”であり, 逆にインドネシアの上位評価語の中で日本の上位評価語に登場しなかったものは, “女性的な”, “柔らかい”, “あじわいがある”, “陽気な”, “上品な”, “ていねいな”等, 日本が主に刺激1(色白肌)に対して選択していた評価語が多く含まれていたことが興味深い。

その他の評価語でインドネシアに1%水準で有意に多く観察された評価語は, “のんびりした”, “愉快な”, “きりっとした”, “育ちがよい”, “特色のある”, “軽い”, “おとなしい”, “貴族的な”であり, 日本では, “清潔な”, “甘い”, “保守的な”, “いやらしい”, “ふけた”が挙がっていた。

Figure 2. 刺激1（色白肌）を第1選択にした場合の
数量化 III 類による分析結果（1 軸×2 軸）.

Figure 3. 地域別・性別に関する数量化 III 類による
分析（1 軸×2 軸）.

日本の男性が特に多く選択していた評価語は、“可愛らしい”であり、“やさしい”、“美しい”、“柔らかい”という評価語も女性より多く選択された。日本女性の場合は“明るい”、“落ち着いた”、“知性的な”、“あじわいがある”、“モダンな”が男性の上位評価語には見られない特徴的なものであった。インドネシアの男性の場合は、“モダンな”、“うちとけた”、“愉快な”、“あたたかい”が多く、またインドネシアの女性の場合は、“美しい”、“善人のような”、“知性的な”、“親しみやすい”、“のんびりした”が特徴的なものであった。インドネシアの場合、“女性的な”イメージを普通肌の色白寄り（刺激2）に抱いているが（I；56.8%，J；17.6%），その傾向は特にインドネシア人女性の方に多く見られた（男性；44.1%，女性；70.3%）。

数量化Ⅲ類による1軸と2軸のプロットから刺激2に対する両地域の特徴を探ると、インドネシアではこの刺激に対して“女性的”（I；56.8%++，J；17.6%-）で“上品”（I；45.5%++，J；14.8%-）で“貴族的”（I；21.2%++，J；7.4%-）なイメージを抱いているのに対し、日本では“うすっぺら”（J；55.7%++，I；8.3%-），“消極的”（J；10.2%++，I；5.3%-），“保守的”（J；18.2%++，I；5.3%-）なイメージをもっているのがわかった。またインドネシアの男性の場合、“特色のある”（J-m；6.7%-，J-f；17.4%，I-m；35.3%++，I-f；21.9%），“おとなしい”（J-m；12.2%，J-f；3.5%-，I-m；29.4%++，I-f；23.4%）イメージとの関連が見られるのに対し、インドネシアの女性の場合は“きりっとした”（J-m；18.9%-，J-f；20.9%，I-m；30.9%，I-f；42.2%++）イメージとの関連もあるようだ。いずれにしてもポジティブな傾向をもつ評価語はインドネシアの方向に、ネガティブな傾向をもつ評価語は日本の方向に二分されており、両地域のこの刺激に対する評価の違いが明らかとなった。

刺激3（普通肌の色黒寄り）に関する分析結果 刺激3を第1選択とした評価語として総合的に最も多かったものは“親しみやすい”の81反応であり、この反応数を他の刺激に対する反応数と比較すると4刺激中で最も第1選択になりにくかった刺激であったことがわかる。

両地域に共通して多く選ばれた評価語としては、“親しみやすい”、“意志が強そうな”、“うちとけた”、“愉快な”、“近づきやすい”、“あたたかい”、“落ち着いた”、“陽気な”、“はきはきとした”であるが、このうち、“はきはきとした”という評価語はインドネシアでは第1位となっているのに対し、日本では15位である。また日本で多く選ばれた評価語はインドネシアで上位に選ばれた評価語と異なっていた。すなわち日本の上位評価語は、“ふけた”、“あじわいがある”、

“貧相な”、“ねちねちした”、“モダンな”、“古くさい”のようにネガティブなイメージのものが多く、インドネシアの場合は“のんびりした”、“善人のような”、“可愛らしい”、“りこうそうな”、“好き”というようにポジティブなイメージも含まれている。その他の評価語で有意に多く選択されていたものは日本では“しゃれた”、“きりっとした”、“明るい”、インドネシアでは“女性的な”、“おとなしい”、“育ちがよい”等の評価語であった。

日本で多く選択された“貧相な”というイメージは特に日本人男性が多く抱えているイメージであった。日本の男性の場合はそのほかに、“ねちねちした”、“のんびりした”、“落ち着いた”、“丸みのある”が多いが、女性の場合は、“きりっとした”、“りこうそうな”、“はきはきとした”、“明るい”が多く、ポジティブな評価語が男性よりは若干多く見られる。インドネシア女性の場合も、“うちとけた”、“美しい”というポジティブなイメージが多くもたれているが、インドネシア男性の場合になると、“うすっぺらな”、“女性的な”、“古くさい”、“うわべだけの”、“甘い”、“保守的な”というようにネガティブなものが多くなり、両地域に共通してこの刺激に対する性差が感じられた。

数量化Ⅲ類による分析では、インドネシアは“美しく”（I；13.6%+，J；5.7%-）“女性的”（I；14.4%++，J；5.1%-）なイメージを刺激3にもっているのに対して、日本では“ふけた”（J；23.9%++，I；8.3%-）“貧相”（J；22.2%++，I；4.5%-）なイメージが中心であることがわかる。インドネシアの男性の場合は“育ちがよい”（J-m；2.2%，J-f；0.0%，I-m；10.3%++，I-f；3.1%），“デリケートな”（J-m；3.3%-，J-f；2.3%，I-m；11.8%++，I-f；1.6%）という方向にベクトルが向いており、女性の方は“美しく”（J-m；5.6%-，J-f；5.8%，I-m；11.8%，I-f；15.6%+）“可愛らしい”（J-m；10.0%-，J-f；3.5%-，I-m；13.2%，I-f；25.0%++）という評価語の方向にベクトルが向いている。日本人男性の場合も“ねちねちした”（J-m；26.7%++，J-f；16.3%，I-m；8.8%，I-f；9.4%），“貧相な”（J-m；27.8%++，J-f；16.3%，I-m；5.9%-，I-f；3.1%-）の方向にベクトルが向いており、日本人女性の場合は“モダンな”（J-m；15.6%，J-f；22.1%++，I-m；5.9%-，I-f；4.7%-），“きりっとした”（J-m；8.9%，J-f；22.1%++，I-m；2.9%-，I-f；4.7%），“明るい”（J-m；10.0%，J-f；2.3%，I-m；11.8%++，I-f；1.6%）の方向にベクトルが向いていた。総じて日本もインドネシアも女性はこの刺激3に対して“陽気”で“愉快”で“うちとけた”イメージをもっているのに対して、男性は“古くさい”イメージをもっているようである。先にも述べたように性差が比較的多く表れているのがこの刺激の特徴とな

っている。

刺激4（色黒肌）に関する分析結果 刺激4を第1選択とした評価語として総合的に最も多かったものは“女らしくない”の237反応であった。両地域に共通して“女らしくない”，“派手な”，“いやらしい”，“うわべだけの”，“はきはきとした”，“意志が強そうな”，“貧相な”，“ふけた”，“うすっぺらな”，“ねちねちした”という評価語が多く選ばれていた。

日本での特徴的な評価語は，“特色のある”，“いばった”であり，これらはインドネシアで刺激1（色白肌）への評価であったのが興味深い。そのほか，“軽い”，“陽気な”，“愉快な”も日本での上位評価語である。インドネシアの上位評価語は，“古くさい”，“消極的な”，“甘い”，“静かな”，“丸みのある”で，これらは逆に日本の刺激1への評価と多く一致する。この傾向はそれ以外の評価語でも同様に見られ，日本で有意に高かったものは，“あじわいがある”，“しゃれた”，“モダンな”，“明るい”であるのに対し，インドネシアでは“デリケートな”，“保守的な”，“可愛らしい”，“おとなしい”，“ていねいな”等であり，総合的に刺激1と刺激4への評価が両地域で逆転している結果となった。

日本人男性の場合，“あじわいがある”，“うすっぺらな”が日本人女性には観察されない上位評価語であるのに対して，日本人女性の場合は，“きりっとした”，“ねちねちした”が上位評価語として特徴のあるものであった。この中で“きりっとした”は日本人女性が刺激3に対しても上位に選んだ評価語であったことを考え合わせると，日本の女性の場合，肌の色が濃くなると“きりっとした”印象をもち始めることがわかる。インドネシアの男性の場合は“保守的な”というイメージが特徴的であり，インドネシアの女性の場合は，“派手な”，“うちとけた”，“デリケートな”が上位評価語として特徴的であった。

数量化Ⅲ類の分析結果から判断すると，この刺激に対してインドネシアでは“丸みのある”（I；34.1%++，J；11.9%--），“静かな”（I；35.6%++，J；4.5%--），“保守的な”（I；28.0%++，J；3.4%--），“おとなしい”（I；17.4%++，J；4.5%--），“デリケート”（I；30.3%++，J；3.4%--）なイメージをもっており，日本では“特色がある”（J；69.9%++，I；6.8%--），“軽い”（J；51.1%++，I；9.8%--），“いばった”（J；58.5%++，I；8.3%--），“陽気”（J；48.9%++，I；6.1%--）なイメージとのかかわりがそれぞれ多いことがベクトルの方向からわかる。

またインドネシアの男性は“ていねい”（J-m；5.6%－，J-f；5.8%，I-m；11.8%，I-f；15.6%＋）で“落ち着いた”イメージを抱き，日本の場合は男性も女性も“特色のある”，“軽い”（J-m；56.7%++，J-

f；45.3%++，I-m；7.4%--，I-f；12.5%--）“いばった”（J-m；56.7%++，J-f；60.5%++，I-m；7.4%--，I-f；9.4%--）イメージとのかかわりを多くもっていることが明らかとなった。

考察および結論

白に対する嗜好性を検討するために調査1では一般的な嗜好色順位における白の位置付けを確認した。その結果，白は両地域で高く嗜好される色であり，日本をはじめとする周辺アジアの地域で共通する嗜好色であることがわかった。またその理由としては清潔感や明るさが両地域に共通していた。

続く調査2では，この明るさと白さが関連深いことから，肌の色における白さ（明るさ）に対する嗜好を具体的な指標とし，白への嗜好をより深く追求してみることにした。その結果，各刺激に対する評価にはそれぞれ特徴があったが，肌の白さに対する評価は両地域でかなり異なっていることがわかった。

色白の肌は日本では“弱々しい”イメージが強いものの，その弱々しさは，“おとなしくデリケートで保守的な”印象や，“やわらかく女性的で可愛らしい”イメージとの結び付きであることがわかった。それに対してインドネシアでは，同様に“弱々しく”“清潔な”印象は強いものの，“いばった”イメージや“派手な”イメージ，また“幼い”イメージなど，どちらかと言えばネガティブな傾向をもっていた。ポジティブな場合でも“特色のある”“しゃれた”イメージなど，ある種の特殊性が感じられた。

しかし結果でも述べたように，このような相反する関係は刺激4において逆転した形で見られる。すなわち日本人が刺激4（色黒肌）に抱いたイメージはインドネシア人が刺激1（色白肌）に抱いたイメージと一致し比較的ネガティブな傾向をもち，逆に日本人が刺激1（色白肌）に抱いたイメージはインドネシア人が刺激4（色黒肌）に抱いたイメージと多く一致しポジティブな傾向をもつという点である。この理由に関しては何らかの文化的背景とその影響を感じさせるが，本研究結果からは明らかではなく，別な視点からのより深い研究が必要と考えられる。

またインドネシアの場合，肌の色の濃さは加齢を意味するようであることが，“幼い”“ふけた”という評

3 特に西洋絵画では年配者には褐色の肌，若者にはたとえ男性であっても色白の肌のように，老若の対比を肌の色で表現した。またエジプトやローマの壁画でも男女の肌の色分けを慣習的に行っており，男は褐色，女は白，と明確な性別の区分を示す記号としていたようである。1400年ごろに書かれたと思われるイタリア初期ルネッサンスの画家であるCenniniの書（「Il libro dell'arte」）にも既にその約束事は記されている。このように色白肌は女性らしさと結びつき，褐色の肌は男性らしくない，すなわち男性的なイメージと結びつく背景は絵画にも見出せる。

価語とのかかわりでわかった。すなわち“幼い”と刺激1(色白肌)、“ふけた”と刺激4(色黒肌)との結び付きがインドネシアでは比較的多く見られた。また日本では、刺激1(色白肌)、インドネシアでは刺激2(普通肌の色白寄り)に対してそれぞれ“女性らしい感じ”を抱き、逆に刺激4(色黒肌)に対しては両地域とも“女らしくない感じ”をもっていた。このように年齢の老若や性別(男らしさ・女らしさ)を肌の色の濃さで対比させるような概念は既に紀元前の壁画にも見られるように一種の記号化された概念や技法でもあり、これらの結果はそのような一般概念の影響とも考えられる³。

有意な性差も多く観察された。特に刺激3(普通肌の色黒寄り)では日本もインドネシアもネガティブな評価をしているのが男性であり(J-m:貧相な、ねちねちした等。I-m:うすっぺらな、古くさい、うわべだけの等)、女性はむしろポジティブな受け止め方をしていた(J-f:きりっとした、りこうそうな、はきはきとした、明るい等。I-f:うちとけた、美しい等)。

美しさの判断に関して言及するならば、色白肌を“美しい”と評価しているのは日本人の方であり(刺激1:J;60.8%,I;39.4%),インドネシアの場合はむしろ普通肌の色白寄りを“美しい”と選択していた(刺激2:J;31.3%,I;53.0%)。また嗜好性という点から“好き”という評価語に着目するならば、“好き”と思われていたのは、日本もインドネシアも、最も色白の印象をもつ刺激1よりも刺激2の普通肌の色白寄りであったことが明らかとなった。更に“おだやかで魅力的で知性的”というパーソナリティーと多く関連しているのは、両地域とも刺激2の普通肌の色白寄りであり、“陽気で親しみやすくあたたかいパーソナリティー”としてとらえられているのは、刺激3の普通肌の色黒寄りであることを考えあわせると、パーソナリティーの側面からは肌の色は中庸であることが最も好ましいようである。

色彩に対する嗜好は具体的な形態を伴った場合に变化することは林・相馬(1990)の研究でも明らかであるが、本研究からも同様の結果となった。すなわちアジアにおいて高く嗜好される白は、その嗜好の背景の一つに明るさとの関連もあるが、肌の色という具体的事象になった場合、肌の白さの嗜好に対する影響要因

には性差や文化差など個体要因や環境要因等の多くの側面がより複雑にかかわりその嗜好構造は変化してくる。

但し肌の色における白さが重んじられるのは、その貴族的なイメージとデリケートで弱々しいもろさを含む、ある種の“特殊性”が関連しているようであることも本研究の結果から明らかとなった。このことはまた日本をはじめとする周辺アジア地域に共通する白嗜好がその“特殊性”や“稀少性”から次第に珍重され、徐々に好まれていったという変容を示唆するのかもしれない。

引用文献

- 林 知己夫・相馬一郎 1990 パッケージデザインの基礎研究 花王株式会社調査部
 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店
 小林嗣幸 1967 おしゃれの色彩 日本色研事業株式会社
 日本色彩研究所色彩情報研究会 1992 第12回消費者の色彩嗜好調査報告書データ集 (財)日本色彩研究所
 齋藤美穂 1981 色彩嗜好におけるCross-Cultural Research 早稲田大学文学研究科紀要, 27, 211-216.
 齋藤美穂 1992 アジアにおける色彩嗜好の国際比較研究(1)——日韓比較・白嗜好に着目して—— 日本色彩学会誌, 16, 1-10.
 Saito, M. 1994 A cross-cultural study on color preference in three Asian cities: Comparison between Tokyo, Taipei and Tianjin. *Japanese Psychological Research*, 36, 219-232.
 齋藤美穂・富田正利・向後千春 1991 日本の四都市における色彩嗜好(1)——因子分析的研究—— 日本色彩学会誌, 15, 1-12.
 齋藤美穂・富田正利・山下和幸 1991 日本の四都市における色彩嗜好(2)——クラスター分析によるライフスタイル特性の類型化—— 日本色彩学会誌, 15, 99-108.
 Tsukada, I., Funatsu, K., & Sato, M. 1964 A study on color preference. *Acta Chromatica*, 1, 131-146.

——1995. 9. 4 受稿, 1996. 1. 20 受理——